

# 古代日本とユダヤの多くの謎

河野 百雄

本題に入る前に前段としてユダヤについて少しのべてみたい。

古いユダヤの民族は、羊と牛を連れて草原の草を求めて生活を立てる遊牧の民族であった。紀元前一〇一年前に農耕を主とする君主国家として創立された国である。

初代の王をダビデといった。二代目をソロモンといった。旧約聖書のモーゼを信奉する一神教主義の民族であった。

ところが約九十年後、突然内乱が起き、分裂して、北朝十種族と南朝二種族の国となった。

だが、約二十年後十字軍の侵略で北朝十種族は亡び、何処となく旅立ってしまう。いわゆる失われた十種族となるわけである。

南朝の二種族は残ることとなるが、ユダヤと云う国滅亡と復活を繰り返す異常な国となった。

しかし、ユダヤには、厳しい戒律があり、犯してはならない三大罪悪、三大義務と十戒というものが制定されており、これらを忠実に守り父母を敬愛し、子供を誠実に育てる民族となったのである。

◇ 三大罪悪とは

- (1) 偶像崇拜
- (2) 殺人
- (3) 姦淫

◇ 三大義務とは

- (1) トーラ（聖書の勉強）
- (2) アボダー（礼拝、労働）
- (3) ゲミルス、ハサデーム（慈善行為）

◇ 十戒

- (1) 神はひとつである。
- (2) 偶像を崇拜してはいけない。
- (3) 神の名をみだりに唱えてはいけない。
- (4) 安息日を必ず守る。
- (5) 父母を敬愛せよ。
- (6) 人を殺すなかれ。
- (7) 姦淫するなかれ。
- (8) 盗みをするな。
- (9) 偽証するな。
- (10) 貪欲になるな。

以上の事柄を忠実に守り、日常生活をするという民族である。

ユダヤ人は「メザス」という護符を玄関の右側に張り付け、家内安全を祈る習慣がある。日本でも昔から最近まで、お寺やお宮で祈禱してもらったお札を玄関に張ったものである。今は余りそういうことはなくなった。

一、伊勢神宮の石燈籠と八咫鏡

伊勢神宮に参拝すれば、誰しも気になるのが石燈籠ではないかと

思われる。内宮から外宮へのその参道に約千基程の石燈籠で、その形状が普通の神社にある物とは違っている。

一般神社の石燈籠は、宝珠、笠、火袋、中台竿、台からなっている。

伊勢神宮のものは違っている。上から家形の屋、火袋も飾り窓のあるもの、中台、基台となっている。特に今回指摘したいのは、三つの紋様についてである。

一番上にある紋様は、菊の紋様である。これは天皇家の象徴であるので当然であるが、次の二つに多くの謎がある。二番目のあかり窓の紋様は、複合八葉花文という、ユダヤ王、ヘロデの家紋といわれている。三番目は下の台座にある「カゴメ」印は同じくユダヤの王、ダビデの家紋といわれている。何故にこのような彫刻がなされたのか、その事は、篠原史憲先生の調査によって判明した。

製作した会社は、兵庫県西ノ宮市木藤石材工業会社であることが明らかにになった。その依頼者とは、伊勢神宮、神宮廳長官二荒旧伯爵という方と、もう一人は、神宮奉賛会会長森岡氏であることが判った。

木藤社長は、燈籠については三つもの紋はくどすぎる気がしたので、菊のご紋一つだけを主張したが、二荒長官らはそれを聞き入れず、どうしても、外の二つも入れなければならないと言いつ張った。その理由を尋ねたが説明はしてくれなかった、今ともなれば、二人は故人になり多くの謎となった。ただ、カゴメ印の紋について、それが伊勢神宮の奥宮「伊雑の宮」のご紋であることの説明をうけた。

以上のように、伊勢神宮には多くの謎が残されていることは事実であり、日本の歴史上でも多くの疑問があることも事実である。

八咫鏡については、古事記の神話の中で、天孫降臨の際に天照大神が邇邇芸命に下さった三種の神器の中の一つであるといわれている。今は、伊勢神宮の奥の宮「伊雑の宮」の御神体といわれている。かつて数十年前の新聞紙上で話題になったことだが、三笠宮とトケイヤー氏がオリエント学会の総会での対談のことを再掲したい。

トケイヤー氏いわく、八咫鏡の裏に刻まれた、古代文字？、三つのヘヴライ語について宮さまに尋ねられた。

宮様はこう答えられたという、ヘヴライ語は、噂には聞いたことがあるが事実見たことない、これは誰が見ることの出来ない事であるといわれたという。

## 二 高松塚古墳の謎

高松塚古墳は、現在壁画が解体修理中であるが多くの謎があることがあきらかになった。葬られているのは、長屋王の父、高市皇子といわれているが、多くの学者の意見はまちまちである。

先ず、不思議なことに木棺の正面の飾り金具について、紋様がユダヤ、ヘロデ王のものではないかという説があるが歴史学者は誰も指摘していないことである。

又、人体の骨について、頭の部分がないのは何故か？、同時に埋葬されていた刀剣は銀製品であること、刀身が見あたらないことはどういふことか、骨の推定からして、日本人よりかなり背が高いと、

多くの歴史学者が調査しているが全く全容を語らない。多くの謎が残っているままとなっている、誠に残念な事である。

昭和三十年代には、日本とユダヤとの同祖論が語られていたが、同祖論は全くないと否定論が盛んになっている。しかし、禊や清よめ、塩、言葉、東北の民謡のはやしことば、沖繩の方言と各地にユダヤの関係することの痕跡のあることも事実の様である。

### 三 禊と塩について

禊という言葉が日本で始めて出てくるのは古事記の神話の中である。

伊ザ那岐命が、死んだ伊ザ那美命の後を追って、黄国の国に行き、散々の目に逢い、帰って来て筑紫の国の日向の小門の橋の阿岐原で穢れた心身を浄めるために禊祓いをした。これがはじまりといわれている。

その後、時代は移り替わるけれども、常に日常社会には存在している。江戸時代でも、神様に願をかける際には、必ずといっていいほど、井戸水で身を清め禊をするという習慣があった。

現在でも、宗像神社の宮司が、沖ノ島の神社に当番として島に上陸する際は、必ず海で身を清め禊をする習慣となっている。

大分県でも国東の天念寺などのお寺で修正鬼会で鬼となる人は、前日、お寺の前の川で禊をして身を清めなければならぬ。一般人でも、毎日風呂に入り、身体を洗い、清潔にする、このことも禊、清めからきた生活習慣のあらわれではなからうか？

塩とは、昔は、日本においても汚れを清めるためのものであった。しかし、なぜ塩が清浄をするかは、その意味するものは、わかっていない。

いろいろの儀式で塩をまくことや、国技館で行われる、相撲の取り組み前に、お互いの力士が塩をまいて土俵を清めるならわしがある。また、料理屋で開業のとき、客のくる前に玄関に塩の小さな山を作って、入り口を清めるといふ習慣が過去にはあった。また、家の新築をする際の地鎮祭では塩を壇に供える習慣がある。

葬式に参列した折り、家に帰ったとき、自身の身体に塩をかけるという習慣も一般的である。塩をもつて清めるといふ行いが、何か古代ユダヤの文化と共通性があるのは何故だろうか。

### 四 神官と僧侶の服装

神官の式服は、長い袖にヒモをつけ、また、房をつける。このことは、日本での永い伝統であるといわれている。ユダヤの僧侶の服装が全く同じであることは、誠に不思議であり、その真実はどこにあるのであろうか、ぜひ知りたいと思われる。

### 五 神社と祭り 護符について

日本の太古の神社としては、伊勢神宮と出雲大社があげられる。この二つの神社の神殿には、階段がなく、斜面的な回廊となっている。全国の神社には、そのような形式のものはない、何故だろうか、このような形式の回廊はユダヤの神社と全く同じである。

京都の八坂神社の祇園祭は、独特な祭りであり多くの山鉾の行列があるが、とくに牛車が出ることに、七本の腕の曲がった神具を持った行列がある。さらに十二個のまさかりを持った人があらわれる。これらは、ユダヤ民族そのものの祭りであり、七本の腕の神具は、ユダヤの燭台（メーラ）であり十二個は、ユダヤ民族十二支族をあらわすのである。

祇園祭は七月十七日から行われるが、「旧約聖書」創生編によると、「ノアの方舟」がアララテ山でとまった日がこの日であり、ノアがカナナのシオンの丘に、神殿をつくって、シオン祭りをしたのもこの日であるといわれている。なんとも不思議なことである。

また、祭りで欠くことの出来ない神輿は、ユダヤでは移動式の神社だといわれている。護符即ちお守りのことである。戦前の日本では、神社や仏閣では必ずといっていいほど参拝者は、お札を受け、持ち帰り、神棚へ、また玄関の上に張り付け、魔除けという風習があった。

ユダヤでは、護符をメザスといい、ユダヤの言葉の中に、アブラ、カタブラがあり、これは魔術の力といわれている。ユダヤ人にとって、災いの思想があったようである。日本という言霊信仰と同じ考えではなからうか、今でもお守りを持っていけば、災難を防ぐという信仰は、存在している。

## 六 日本語とユダヤ

西田竜雄氏は、「日本へ稲作を持ち込んだ民族、つまり弥生人は、

チベット、ビルマ語系の特殊化した民族である」との説をだしている。

この新しい説はユダヤ人の祖であるスメル族を起点とする考え方であって、言語学的にもユダヤの影響は無視できないものになったようである。

ユダヤ人は、中央アジアを東に流れ、それは東北と東南に向かつて、二派に分かれたといわれている。また、チベットからビルマに入り、さらに東に向かったグループもあったといわれている。

言語学研究者、故川森田先生によれば、イスラエルの各地に、次のような日本の発音そのままの人名、地名が存在するといっている。

サカイ||酒井、ハナ||花、ハギ||萩、アイ||阿井、アカバ||赤羽、オノ||小野、カノ||加納、シバ||柴、タクマ||田熊、タルミ||垂見、モリヤ||守屋、ヤナイ||矢内、ヨシヤ||吉屋、以上は人名である。

地名では、ミシマ||三島、フルタ||古田、アサムラ||浅村、ハマダ||浜田、ダン||団、タムラ||田村、ウサ||宇佐、などがある。

また、ユダヤ語の「ヤハーダ」は、ユダヤの神を意味する言葉であり、日本語の「八幡」はこの転化したものとも考えられる。

これらのユダヤに存在する日本語と同じ発音の地名や人名は、奇妙なことにすべてユダヤの北半分のみにはないのである。ユダヤの南半分には皆無である。

川森田氏に寄れば、日本には千二百語以上のユダヤ語があると述べている。ヘブライ語を語根とすることばの一部を説明すれば、次のとおりである。

音(オト)、玉(タマ)、畑(ハタケ)、富(トミ)、胎(タイ)、浜(ハマ)、酒(サケ)、笠(カサ)、壁(カベ)、鎖(クサリ)、笛(フエ)、衣(コロモ)、流れ(ナガレ)、野原(ノハラ)、引く(ヒク)、臣(オミ)、寺(テラ)、城(シロ)、搗(ツク)、泣く(ナク)、騒ぐ(サワグ)、吠ゆ(ホユ)、聞く(キク)、次ぐ(ツグ)、揃(ソロウ)、治らす(シラス)、犯す(オカス)、学ぶ(マナブ)、積もる(ツモル)、払う(ハラウ)、洗う(アラウ)、呼ぶ(ヨブ)、滅ぶ(ホロボ)、厳しい(キビシイ)、やたら(ヤトラ)

以上まだ多くのことばがあるが略したい。

## 七 東北地方の民謡とユダヤ

民謡のハヤシコトバの不思議さ、また、驚くことに、日本の民謡の「ハヤシコトバ」は、そのほとんどがユダヤ語であって、しかもそれが日本国の誕生にまつわるという、すごい意味が含まれているという。

かけ声や木遣り唄のハヤシコトバは、戦闘的な意味のものが多い。「ドッコイショ」とは、「蝦夷の残存者を粉碎せよ」という意味になるという。

秋田音頭の「ドードッコイ」や宇佐八幡の盆唄「ドスコイ、ドスコイ」も同じ意味で先住民を追っ払うハヤシコトバである。

「シヨンガイ!シヨンガイ」は「アイヌは逃げた」という意味だという、また、相撲の「ハッケーヨイ、ハッケーヨイ、ノコッタハッケー」の意味は、ユダヤ語で「お前は撃つべし、やっつける、相手

をうち負かせ」ということになるという。

伊勢神宮のある伊勢の民謡、「伊勢音頭」のハヤシコトバは、ことのほか重要で、モーゼの姉の予言者ミリヤムが唄った、非常に政治的、宗教的なことばであるという。

伊勢は津でもつ

津は伊勢にモツヨイヨイ

尾張名古屋はヤンレ城でもつ

ササ、ヤートコセ、ヨイヤナ

アリヤリヤコシワイセ、コノナンデモセ

この「ササヤートコセ」以下の部分がモーゼの姉の予言者ミリヤムの厳肅な歌であるという。

また、同じく三重県の「尾鷲節」のハヤシコトバも、奇妙な意味をもっている。

尾鷲よいとこ、朝日をうけてヨイソレ

浦で五条のあみを曳くノンノコサイサイ

ヤーサホーラエ

オッシヨコ、モオンコ、ノケー

実際ハヤシコトバの部分は、日本語の体をなしておらず、何の意味かさっぱりわからない。大体民謡のハヤシコトバは、すべてこの調子で、日本語としての意味にも、発音にもなっていないものばかりである。

「サッサ」などは、よくあることばであるが日本語の「さあさあ」の転化ぐらいしか普通には考えるよりほかはないが、これは、ユダ

ヤ語では「喜べ、喜べ」という意味であるという。いわれてみればなるほどと納得できる気がする。

さて「尾鷲節」の

ノンノコサイサイ、ヤサホーラエ

オッショコ、モオンコ、ノケー

の意味は、ユダヤ語ではつぎのようになるという。

仇敵はつぎつぎに、徹底的に

撃退させられたり、

邪悪なるものは降伏せり

海の居住地の軋轢は除かれたり

という、なんと勇ましいことばであることがわかった。

まだまだ不思議な民謡は、東北地方に多く残されて現在でも歌い続けられている。

ハヤシコトバは、一種の暗号であったといわれ、ことばの文字のない時代、歌によって色々のことが伝承されたのではないだろうか、これもユダヤの同祖論の一端を物語っているのではないのだろうか。